

コリント人への手紙第二4章 「落胆しない務め」

1A キリストの福音にある光 1-6

1B 真っ直ぐに語る真理 1-2

2B 栄光を隠す世の神 3-4

3B 心に照らされる光 5-6

2A 土の器にある栄光 7-15

1B 自分たちのものではない力 7

2B 倒れても、滅びない者 8-9

3B イエスの死とよみがえり 10-14

4B みちあふれる恵み 15

3A 目に見えない栄光 16-18

1B 内なる人と外なる人 16

2B 一時的な苦難 17-18

本文

コリント人への手紙第二4章を開いてください。私たちは、パウロが、自分が神に立てられた使徒であることを弁明しているところを読んでいます。コリントの教会の人たちとの信頼が揺らいでいる中で、彼は弁明せざるを得なくなりました。その裏には、パウロを引き落としている偽使徒たちの存在があります。4章は、その弁明の中で、自分たちが苦しみに遭っているけれども、落胆しないということを話しています。1節で、落胆していないと言っていて、終わりのほうの16節でも、「ですから、私たちは落胆しません。」と言っています。私たちが、信仰をもって生きている中で、落胆するようなことは数多くありますね。それでも、落胆しない務めとは何かを、見ていきます。

1A キリストの福音にある光 1-6

1B 真っ直ぐに語る真理 1-2

¹ こういうわけで、私たちは、あわれみを受けてこの務めについているので、落胆することがありません。

こういうわけで、と言っていますが、パウロは、新しい契約に仕える務め、御霊に仕える務めについて話していました。キリストに立ち返り、それによって人々の心に覆いを取り除かれます。そして、御霊が自由に働かれるのです。その時、自分自身が鏡のようになります。キリストにある神の栄光を見るようになります。それで自分が鏡のように反射して、キリストの似姿に変えられます。このような希望があるので、落胆することはありませんと言っています。

そして、「あわれみを受けてこの務めについている」と言っていますね。パウロは、このようなすぐれた務めが与えられているのは、もっぱら神の憐れみなのだと言っています。テモテに手紙を書いた時に、第一の手紙ですが、自分は神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者であったのに、信じていない時に知らないでしたことだったので、あわれみを受けましたと言っています(1:13)。全く、自分にはこのような務めにはふさわしくない者なのに、このようにして立っているのは、もっぱら神の憐れみによるのだということです。

² かえって、恥となるような隠し事を捨て、ずる賢い歩みをせず、神のことばを曲げず、真理を明らかにすることで、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。

「恥となるような隠し事を捨て、ずる賢い歩み」とありますが、これは、偽使徒たちが行っているようなことだったのでしょう。人々にへつらうために、ずるがしこい手法で、人々を自分自身にひきつけるのです。恵みの福音を語ることは、人々に自由を与えます。御霊の導き、御霊の支配によって動くように、自分自身は支配できないことを意味します。ですから、必ずしも人々がそのまま快く受け入れるわけではありません。拒む人は拒みます。しかし、それも神にお任せするのです。

それで、自分自身のところに人々を引き寄せたいと思うのならば、いろいろ、マジックのような嘘やごまかしが必要になります。マジック、手品はそれが売りなので、もちろん問題ないのですが、福音を伝えていると言いながら、そういった手法を使うことがいけないのです。何か奇抜なことを語れば、ユーチューブの自分の動画の再生回数が上がるというように、福音宣教者が、何か奇抜なことを言っていく。ネタ作りをして、人々を引き寄せることがあります。時には金銭的な動機も働きます。または、人々がつまずくようなことは言わない、として、福音のすべてを語らないこともあります。罪に対する神の怒りがあること。イエスの御名のみによって救われること、他にはないこと。そうったことは語らないでいることによって、「恥となるような隠し事」をしていることになります。

御霊が自由に働かれる中で、福音を語る者たちの務めは、神の福音を福音として語る、しもべとなることです。そこに付け足しもせず、差し引くこともしないのです。「神のことばを曲げず、真理を明らかにする」と言っていますね。パウロは、「福音を恥とはしない」とロマ書1章で言っていますが、恥がつきものです。けれども、どれほど栄光に富んだ福音なのかを知って、恥とはしないのです。そして、「神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています」と言っています。人々にへつらうことではなく、まっすぐに語って、人々の良心に、自分自身が神に立てられた使徒であるかどうかを任せる、ということです。3章で、推薦状は必要としない、私たちの推薦状はあなたがた自身だと、パウロが言っていましたね。私たちも、ここにしっかりと留まる必要があります。人々が、なかなか福音のことば、神のことばを受け入れてくれないと焦ります。けれども、御霊が働いて人々が変わるので、それぞれの良心に任せていくことが大事です。

2B 栄光を隠す世の神 3-4

³ それでもなお私たちの福音に覆いが掛かっているとしたら、それは、滅び行く人々に対して覆いが掛かっているということです。⁴ 彼らの場合は、この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです。

多くの人々が、福音を受け入れない人々がいると、自分に対して、または他者に対して、なぜ信じられないのか？として原因探しをします。そこには、しばしば、自分たちが分かり易く、効果的に福音を伝えたら人々が福音を拒まずに、信じていくという誤った考えがあります。私たちの務めは、神のことばを曲げずに、真理を明らかにしていくことだけです。それでも、福音を受け入れないのだとしたら、それは、自分自身の伝え方が間違っているのではなく、本人たちが福音を信じ、受け入れることを拒んでいるのであり、自ら滅びへの道を進んでいるということなのです。

ここに、福音宣教における霊の戦いの実の姿が描かれています。福音の中にある栄光は素晴らしいものです。ですから、それを受け入れないほうが、よほど理に適っていないことです。それでも、受け入れないというのは、「この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし」ているということです。福音を光らせないように、輝かせないようにしているのです。これが、霊の戦いです。ここで霊の戦いの戦い方がはっきりとわかります。私たちは、福音を伝える時に、この世の神がその福音のすばらしさを、聞いている人々に暗くさせているという現実をしらないといけません。ですから、福音を伝えても拒んだり、無視したりするのであれば、そこで説得するのではなく、少し引き下がるのです。それは妥協ではありません。むしろ、引き下がって、隠れてひざまずいて祈るのです。主が、この強い者を縛り上げてくださるよう祈るのです。サタンのしわざを台無しにしてくさるよう祈るのです。祈ることによって、その人の心に作られている悪魔の要塞を破壊していただくのです。それから、また福音を語ります。

多くの人々は、何となく神を信じている人たちが多いです。けれども、なぜキリストなのか？という疑問に思っています。しかし、聖書は、「神のかたちであるキリスト」と、キリストにこそ神ご自身の本質があると教えています。「ヘブル 1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、」イエス様は、弟子ピリピに言われました、「ヨハ 14:9 ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」イエス様が、神ご自身であることに福音があり、その光を、世の神は輝かせないようにしています。

3B 心に照らされる光 5-6

⁵ 私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです。

福音を受け入れない人々に受け入れられよう、取り入れようとして、自分自身を宣べ伝えようとしてしまいます。偽使徒たちは、そのことを行っていました。けれども、そうではなく、私たちは、「主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。」と言っています。そして、自分たちはあくまでもしもべです。主に命じられたことを行っていくという、しもべなのです。主から言われたことだけをしていればよいのです。それ以上のことを、主は求めておられません。忠実さが求められています。

自分自身のことを語ることについて、しばしば、証しと称して、自分が過去にいかにひどいところを通して来たかを細かく話す人がいます。けれども、ある牧者が、牧者の卵たちにこう言いました。「汚れた、愚かな罪人である自分のことを話してどうするのだ。自分ではなくキリストを伝えなさい。」福音を伝えているところが、自分がいかに罪深かったかの、自慢話しになってしまっていることがあります。そうではありません、自分の主であるイエス・キリストを宣べ伝えるのです。

⁶「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。

創世記 1 章にある、神の天地創造の箇所です。主が、闇の中にあるところに光があるようにと命じられた、その創造は、私たちの心での新創造をすることを、予め示していました。自然界で行われたことを、世の神の支配の中、暗闇の中に生きている者たちが、光の中に招き入れられるためにも行われるということです。パウロがヘロデに弁明をしている時に、こう言いました。「使 26:18 それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタン⁷の支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。」すばらしいですね、神の創造のお働きが、霊的に福音を語る者たちを通して起こるのです。

そして、「キリストの御顔にある神の栄光」とあります。主ご自身のお顔に、神の栄光があります。主を私たちが見つめることで、私たちも鏡のようになって、主の栄光を反射し、照らします。そして、人々にその知識を輝かせることができるのです。

2A 土の器にある栄光 7-15

1B 自分たちのものではない力 7

そして 7 節で、パウロがこれまで語って来た、肉体における弱さと、キリストにある神の栄光が同時にあるのだということを示す箇所が次にあります。

⁷ 私たちは、この宝を土の器の中に入れていますが。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。

パウロは 3 章では、弱くされて、迫害を受けている自分が、いかに勝利の凱旋に入っているかを、

ローマ将軍の凱旋式に喩えていました。王なるキリストの凱旋に、連れられている捕虜が自分です。敗北しているように見えて、実はキリストの勝利の凱旋の中に入れさせていただいていることを表現していました。ここでは、「土の器に入れた宝」です。土の器は、当時つまらないことにも使う器です。ゴミ箱にも使っていたことでしょう。そのように、何でもない器であり、また、すぐにでも壊れてしまう脆いものです。そこに、キリストの御顔にある神の栄光が入っているのです。

そして、これは敢えて神がそのようにされているのです。「この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではない」ことが明らかになるためです。もし、その器が金銀の飾りがあるようなものであれば、その中に入っている宝に目が行くことはないでしょう。けれども、土の器であれば、その宝に注目するはずで、これが神の意図であり、私たちの肉体において弱くされているのは、そこに神の意図があるということです。

ところが、見た目には不釣り合いに見えます。宝を入れる器なのだから、もっといい器を使わないといけなと思うのです。神がご自分の宝を見せたいと願われているのに、その逆をやってしまうのです。ここから、いかに、自分自身を良くして行こうとする試みが、みこころに反しているかが分かると思います。弱くされている時にみこころがあるのに、強くあろうとするのがみこころであるように錯覚するのです。12章に出てきますが、弱い時にこそ強いのです。

2B 倒れても、滅びない者 8-9

⁸ 私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。⁹ 迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。

このような一見、矛盾した生き方が、キリスト者の生き方です。土の器が、苦しめられる、途方に暮れる、迫害される、倒されるというところに現れています。しかし、窮することはない、行き詰らない、見捨てられない、滅びないというところに、神の宝が現れているのです。キリスト者の生活を、あまりにも単純にして、「信じていれば、苦しみはない」として、苦しんでいれば信仰が足りないとなります。途方に暮れるように方向が見えないのを、祈りが足りないなどとします。迫害されている人々を見向きもしません。倒されているのであれば、信仰の失格者であるとみなします。しかし、そういった単純なものではないのです。苦しめられているのに、なぜか窮していない。途方に暮れているのに、なぜか行き詰まっていない。迫害されているのに、なぜか見捨てられていない。倒されているのに、滅んでいません。

3B イエスの死とよみがえり 10-14

どうして、そうなっているかについて、次に述べます。それはイエスの死とよみがえりが、私たちの内に働いているからだ、ということです。

¹⁰ 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。¹¹ 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されています。それはまた、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において現れるためです。¹² こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働いているのです。

私たちは、いかようにしてキリスト者となったのでしょうか？どのような証しをもって、キリスト者となったのでしょうか？イエス様は、私たちに「信じてバプテスマを受ける者は救われます。」と言われました(マルコ 16:16)。キリストに結ばれた者となり、キリストの死にあずかり、そしてキリストのよみがえりにもあずかりました。これが、キリスト者であることの証しです。これは、日々、私たちの生活の中で体験していくことなのです。イエスの死に渡されています。自分自身がキリストのゆえに死んでいくという体験をしていきます。けれども、それはキリストのよみがえりが見えてくるため、よみがえるためには、まず死に渡されていくということなのです。

キリスト者の勝利主義という言葉が使われることがあります。それは、いつも勝利していることがキリスト者であるということです。悩みがあったら、それは解決！弱さがあったら、パワーアップ！お金が足りなかったら、必要が満たされました！ハレルヤ！それがキリスト者の勝利であるとするものです。いいえ、そうではありません。まことの勝利は、イエスのように、死んでいるかのように見えるのに、そうではない、生きている！というものなのです。イエス様は、すべての苦しみを経ることにより、私たちを憐れんでくださいました。そしてその慰めを私たちが、他に苦しんでいる人々に分かち合うことができるようにされています。けれども、それは単なる同情ではなく、それ以上の励ましであり、生きるキリストを経験するところの苦しみのことです。

¹³「私は信じています。それゆえに語ります」と書かれているとおり、それと同じ信仰の霊を持っている私たちも、信じているゆえに語ります。

パウロは、この 13 節で、「私は信じています。それゆえに語ります」というのは、詩篇 116 篇 10 節からの引用です。116 篇には、苦しみ、死の綱から救い出してくださいという祈りの中で語ったものです。主が救ってくださったとも言っています。ですから、ここで、自分たちもイエスの死を身に帯びているけれども、必ず救い出し、イエスのいのちにあずからせていただけるという意味で、信じる、それゆえ語る、と言っているのです。私たちも、苦しみの中にいる時にも、「それでも、私は信じる。そして語る」として、信仰の霊をもって語る必要がありますね。

¹⁴ 主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださることを知っているからです。

パウロは、自分たちの肉体が減んでも、イエスと共によみがえることを信仰によって宣言しまし

た。そして、コリントの人たちも一緒によみがえり、御前に立たせてくださることを知っていると言っています。ここにパウロの、信頼がありますね。コリントの人たちは、確かに福音の中に立っているのだという確信です。だから、主が携挙してくださった時に、彼らといっしょに主の前に立つことができるという確信です。

4B みちあふれる恵み 15

¹⁵ すべてのことは、あなたがたのためであり、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現れるようになるためなのです。

ここに、パウロやテモテの思いが書かれています。自分たちの身に起こっていることは、決して教会と離れて起こっていないということです。「あなたがたのためであり」と言っています。自分たちは教会と一つになっているのだ、コリントの教会と一つになっているのだということです。そして、彼らの働きによって、恵みがますます多くの人々に及んでいきます。及ぶのは、神の恵みなのです。神の麗しさ、すばらしさが人々に広がっていきます。そして神の栄光が現れます。

3A 目に見えない栄光 16-18

1B 内なる人と外なる人 16

¹⁶ ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

パウロは、初めに語った「落胆しません」という言葉を繰り返しています。恵みが多くの人々に及んでいること、感謝が満ちあふれ、それで神の栄光が現れているのですから、自分たちの体が弱まっても、落胆しないのです。

そしてパウロは、「私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」と言っています。彼は迫害や苦難があるなかで、外側の自分は衰えています。けれども、内なる人は日々新たにされているのです。イエスのいのちが働いています。そして、さらに前には、御霊の働きで、主の栄光を鏡で反射させながら、栄光から栄光へと主の似姿に変えられているのです！内なる人は、苦しみの中で忍耐を生み、忍耐が品性を生み、品性が希望を生みます。苦しみがあるからこそ、このように内側が新たにされていくのです。

2B 一時的な苦難 17-18

¹⁷ 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。

午前礼拝でじっくり見て行きましたが、パウロは、今の苦しみを将来の栄光と比べています。この

からだにおいて行っていることに対して、神は永遠の報いを与えてくださいます。彼の通った苦しみは、あまりにもすさまじいのですが、その苦しみが軽くなるほど、後の栄光は、とてつもなくはるかに優れているということです。パウロは、ロマ 8 章で、「8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないと私は考えます。」と言っています。しかも、今の苦難は一時的です。後の栄光は永遠です。この比較も大事ですね。

ですから、キリスト者の頑張りは、天を見上げる頑張りです。今の苦難を我慢することではなく、希望に裏打ちされて生きることです。どれだけ、天にある希望を信仰によってはっきりと見ているのかが問われています。それによって、今の苦しみが軽くなっていくのです。

¹⁸ 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

目に見えるものは、苦しみが多いことをみました。また罪や誘惑、惑わしも多いです。目に見えるものは、見て行かないといけないのですが、けれども目を留まらせることはいけません。目を留まらせるのは、目に見えないものです。霊的な世界です。ここに、目に見える世界をも影響を与えているのを知るので。

そして、目に見えないところにこそ、永遠があります。目に見えているものがどうしても私たちに身近で、永続すると思ってしまうのですが、その反対です。目に見えないところに、永続するものがあり、永遠の希望の中で今を生きます。そうすることによって、私たちは苦しみの中でも落胆しないのです。むしろ、そこに人々に恵みを及ぼす、イエス様のいのちがあります。